

題目：愛の形は社会によって異なるか？—社会生態学的アプローチに基づく日加比較研究—

氏名：乾マリ子

指導教官：結城雅樹

一般に、愛というものは人類に普遍的なものだと理解されることが多いが、過去の比較文化研究において、人々の経験する愛には、文化によってその形態や強度が異なる傾向があることが示されてきた (Dion & Dion, 1993)。しかし先行研究では、愛についての文化差がなぜ生じるかという文化差の起因については詳しく言及されていない。そこで本研究では、愛の文化差の原因について、社会生態学的アプローチの立場から解明することを試みる。具体的には、愛についての代表的な理論である、Sternberg (1986) の愛の三角形理論に関する研究を日本とカナダで行い、そこで得られた差異を、それぞれの社会における対人関係選択の自由度を表す関係流動性 (Yuki et. al., 2007) の差異から説明づけることを試みる。

北米に代表される高関係流動性社会では、対人関係選択の自由度が高いため、自分よりも魅力的な第三者が現れた場合、交際中の相手に関係を断ち切られてしまう可能性が高い。そのため、恋愛関係にある相手に逃げられないために、積極的に相手を繋ぎ止めておく必要がある。こうした社会状況においては、愛を構成する親密性、情熱、コミットメントの三要素を持ち、相手に対する自らの行動をコントロールすることが、関係相手を繋ぎ止めておくための戦略的デバイスとして有用に働くだらう。一方、東アジアなどの低関係流動性社会では、対人関係選択の自由度が低いため、自分より魅力的な他者が現れたとしても、自分が好意を寄せる相手や交際中の相手に関係を断ち切られてしまう可能性は低い。こうした社会状況では、親密性や情熱やコミットメントといった心理デバイスを用いて相手を積極的に繋ぎ止めておく必要性は低いだろう。

以上の仮説を検証するため、カナダと日本において質問紙調査を行い、両国間における三要素の差異に対して関係流動性を媒介変数とした重回帰分析を行った。分析の結果、予測と合致して、親密性における差異において、関係流動性の媒介効果がみられた。情熱とコミットメントの差異に対する媒介効果がみられなかったことに対しては、関係の発展段階によって要素の機能が異なることによる可能性がある。今後は、交際相手がいる参加者に対して、交際し始めの初期段階から長期的に、三要素の程度についての測定を行い、どの時点で関係流動性の媒介効果が見られるのかを検討する必要がある。